

積極的にコミュニケーションを図る児童の育成
～「タスク活動」と「『つなぎ言葉』を取り入れた活動」を通して～



那覇市立真嘉比小学校教諭
松川 好孝

目次

I	テーマ設定の理由	13
II	研究目標	
III	研究仮説	14
1	基本仮説	
2	作業仮説	
IV	研究構想図	14
V	研究の内容	14
1	積極的にコミュニケーションを図る児童を育むために	
(1)	積極的にコミュニケーションを図る指導の工夫	
(2)	「積極的に外国語を聞いたり、話したりすること」	
(3)	話し手と聞き手に応じた指導の工夫	
①	話し手に応じた指導	
②	聞き手に応じた指導	
2	「タスク活動」とは	
3	『『つなぎ言葉』を取り入れた活動』とは	
(1)	「つなぎ言葉」について	
(2)	「非言語コミュニケーション」について	
VI	授業実践(第5学年)	18
1	単元名	
2	単元目標	
3	指導計画	
4	本時の指導(4 / 4 時間)	
(1)	目標	
(2)	授業仮説	
(3)	展開	
(4)	評価	
VII	結果と考察	19
1	検証1	
2	検証2	
3	学びのひろがり	
VIII	研究の成果と課題	24
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献》

積極的にコミュニケーションを図る児童の育成 ～「タスク活動」と「『つなぎ言葉』を取り入れた活動」を通して～

那覇市立真嘉比小学校教諭 松川好孝

I テーマ設定の理由

中央教育審議会答申(平成20年3月)により、外国語教育の重要性が指摘され、今回の学習指導要領改訂に伴い、小学校に外国語活動が新設された。

外国語活動は、外国語を通じてコミュニケーション能力の素地を養うことをめざしている。学習指導要領解説外国語活動編によると、コミュニケーション能力の素地を養うためには、「コミュニケーションへの積極的な態度を身に付けることが重要」とある。コミュニケーションへの積極的な態度とは、「日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度」と示されている。

積極的にコミュニケーションを図るようになるには、まず、話し手としては「言いたい」「伝えたい」という思いを持つことが重要である。また、聞き手としては話し手を肯定的に受け入れる態度を身に付けることが重要である。なぜなら、聞き手のその態度によって、話し手の話す意欲が高まり、「言いたい」「伝えたい」という思いがさらに強くなるからである。

これまでの授業実践を振り返ると、友達とのコミュニケーションを楽しませるより、ゲームやクイズ等の楽しさを味わわせることが中心になっていたことに気づいた。また、コミュニケーションを図る活動や発表の場面では、外国語表現を練習した通りに発話するだけになり、聞き手も用意された通りの質問をするなど、形式的な活動や発表になっていた。

そこでまず、「タスク活動」を取り入れる。そのことによって、これまでに学習した外国語表現をそのまま使うのではなく、自分で言葉を取捨選択し、自分の気持ちを乗せて相手に思いを伝えることができるからである。次に、「『つなぎ言葉』を取り入れた活動」を行う。会話をつなげて続けていくために必要な「つなぎ言葉」を聞き手が使えるようになることで、双方向的なコミュニケーションが生まれると考える。このことによって、話し手の一方的な発話が、話し手と聞き手の双方向的なやりとりになり変わり、話し手は「自分のことが受け止めてもらった」と実感し、「もっと自分のことを伝えたい」という気持ちになるだろう。

これらの体験を積み重ねていくことで、積極的にコミュニケーションを図る児童を育成することにつながると考える。話し手が伝えたいことを自分の言葉として考えて発話し、聞き手が「つなぎ言葉」を用いて会話を続けていくことによって、コミュニケーションを図る楽しさを味わい、そのよさを実感できるだろう。そのことが、積極的にコミュニケーションを図る児童の姿と考える。

そこで本研究では、これまでに学習した外国語表現を使って、自分で考えて発話する「タスク活動」と「『つなぎ言葉』を取り入れた活動」を行えば、積極的にコミュニケーションを図る児童を育てることができるだろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

積極的にコミュニケーションを図る児童を育成するために、外国語活動における「タスク活動」と「『つなぎ言葉』を取り入れた活動」を研究する。

Ⅲ 研究仮説

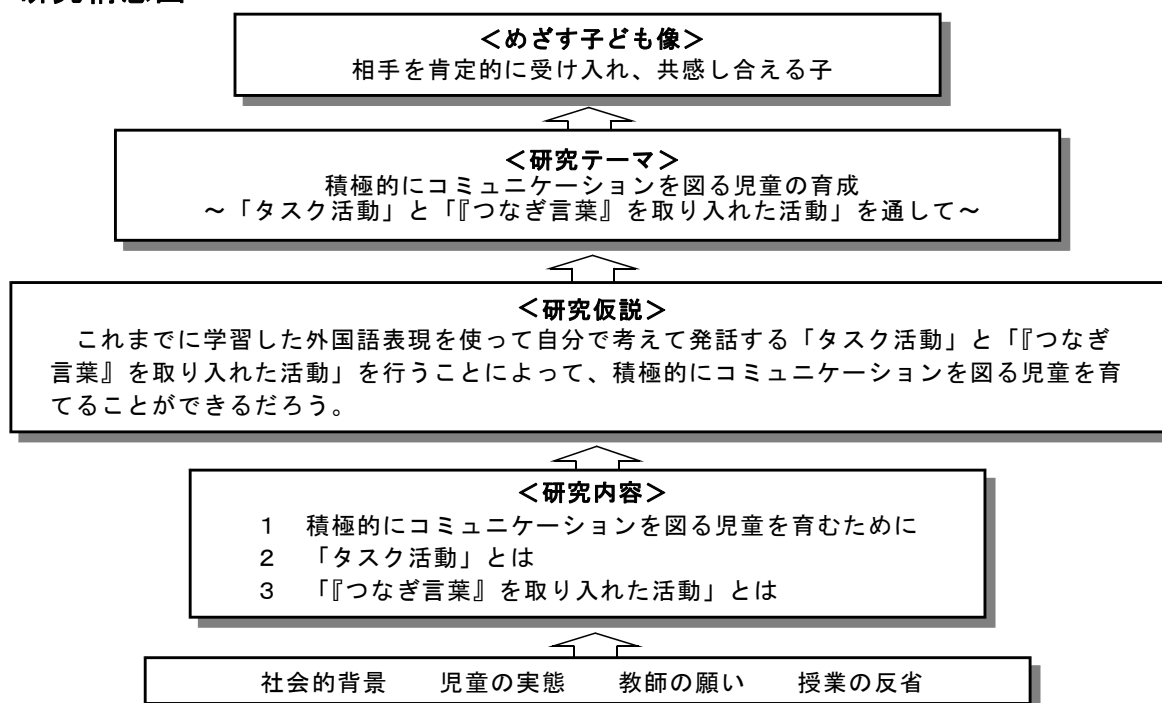
1 基本仮説

これまでに学習した外国語表現を使って自分で考えて発話する「タスク活動」と「『つなぎ言葉』を取り入れた活動」を行うことによって、積極的にコミュニケーションを図る児童を育てることができるだろう。

2 作業仮説

- (1) グループで相談し、「夢の時間割」を協力しながら作り、伝え合う「タスク活動」を行うことで、友達とコミュニケーションを図る楽しさを味わうことができるだろう。
- (2) 「つなぎ言葉チャンツ」で身に付けた「つなぎ言葉」を、友達とのやりとりの中に取り入れることによって、コミュニケーションを双方向に図っていると実感できるだろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究の内容

1 積極的にコミュニケーションを図る児童を育むために

(1) 積極的にコミュニケーションを図る指導の工夫

卯城・蛭田(2009)は「コミュニケーションは『相互的な関係』であり、また『協調的な性格』を持つ」と述べている。コミュニケーションは話し手と聞き手のやりとりであり、相互の関係の中で、話し手は聞き手に、聞き手は話し手に、それぞれに影響を与え合っている。児童が積極的にコミュニケーションを図るためには、積極的にコミュニケーションを図りたくなる活動を工夫することはもちろん、話し手と聞き手のそれぞれに応じた指導を工夫しなければならない。

(2) 「積極的に外国語を聞いたり、話したりすること」

学習指導要領解説外国語活動編には、「積極的に外国語を聞いたり、話したりすること」

等、積極的にコミュニケーションを図る指導について示されている。児童が積極的に外国語を聞いたり話したりして、コミュニケーションを図るためには、その活動場面をより自然な状況に設定することが重要であると考ええる。

例えば、テーマが買い物の場合、単に客と店員側に分かれて、「いくらですか」「500円です」の買い物ごっこのワンパターンな活動では、コミュニケーションの楽しさを体験することは難しい。しかも、「積極的に」とはなりにくい。これには、ダイアログの暗記、質問に対するワンパターンな答え方の定着を図ることにとどまり、知的な要素が含まれているとは言えないのではないか。この場合、販売する品物を児童に自由に考えさせたり、値段を考えさせたりして交渉させるなど、児童が必然的に考えざるをえない状況をつくりあげる工夫が必要だと考える。

図1 積極的にコミュニケーションを図る場面例

兼重・直山(2008)は、積極的に外国語を聞いたり、話したりする例として、次の場面をあげている(図1)。

客は cucumber という単語を知らない店員に対して、どのように説明しようか考え、これまでに学習してきた a long green vegetable と salad を使っている。そして、店員は客の言葉から様々な野菜を想像し、最後はきゅうりと理解することができた。

店員 : May I help you?
客 : Yes, I'd like a cucumber.
店員 : Sorry. What's a cucumber?
客 : It's a long green vegetable.
店員 : (緑で長い野菜?) 冬瓜?
客 : No. I eat it with salad.
店員 : (サラダにして食べる緑で長い野菜?)
Oh, きゅうり, Here you are.
客 : Thank you.



コミュニケーションを図るための活動場面を設定する際、このように「何とかして伝えたい」「何とかして相手の言うことを理解したい」という気持ちが、児童に湧くかどうか重要であると考ええる。

(3) 話し手と聞き手に応じた指導の工夫

① 話し手に応じた指導

話し手には「言いたい」「伝えたい」という思いを持たせることは重要である。その方法の1つに、「タスク活動」がある。大城・直山(2008)は、「タスク活動では、設定された課題や作業などを達成するために、適切な言葉を既習の言葉の中から児童が自分で選択します。児童が自分の立場で、自分の気持ちをのせて相手に自分の思いを伝えます」と述べている。このことから、積極的にコミュニケーションを図るために、「タスク活動」は話し手にとって有効だと考えられる。

② 聞き手に応じた指導

積極的なコミュニケーションが図られるためには、聞き手に相手の考えや思いを肯定的に受け止める「受容的な態度」を身に付けさせることが重要である。なぜならば、聞き手の「受容的な態度」によって、話し手は、「相手が興味を持って聞いてくれた」「自分のことが受け止めてもらえた」と感じ、「もっと自分のことを伝えたい」という気持ちになるからである。その意欲が積極的にコミュニケーションを図る態度につながると考える。

2 「タスク活動」とは

タスクとは「課題」の意味で、実生活に即した場面設定において、課題を達成するために、習った英語を使う活動が中心となる指導である。高島(2000)は、タスク活動を、「学習者が

使用する言語形式を主体的に選択し、相手との自然なコミュニケーションを通して、与えられた課題を遂行する、原則としての対話形式の活動や発表を指すもの」と定義している。

大城・直山(2008)は、「コミュニケーション活動では、慣れ親しんだ言葉を使うことが目的となるが、タスク活動では、ある場面の中で、与えられた課題や作業を遂行することが目的であり、慣れ親しんだ言葉はその手段となる」と述べ、タスク活動の例として、次のように示している。

例えば、自分の「好きなもの表」を作り、それをもとに自分の好きなものを紹介するタスク活動を設定します。児童は、今までに学習したスポーツ、色、食べ物、数字などから、自分で言葉を選んで、自分の思いを乗せて言葉を発します。好きなもの絵カードをもらうために、児童は、「I want ~.」あるいは、「~,please.」または、「I like ~.」と言うでしょう。そして、表にそれらの絵カードを好きなように貼り、表を完成します。「I like ~.」と児童はその表をもとに自分の好きなものを説明するでしょう。

さらに、「児童はタスク活動によって自己表現をします。自己表現とは、『自分の思いを乗せて、自分で言葉を選択して表現すること』だと言えます」とも述べている。また、岡・金森(2009)は「ドリル的な活動だけでは十分に満足できない高学年などの活動において、知的好奇心をくすぐるタスク活動は効果的です。特に、グループの仲間と一緒に、英語を使って何かを成し遂げるようなタスク活動を取り入れるとよいでしょう」と述べている。

タスク活動を取り入れることによって、発話する内容が自分に深く関わるものとなる。つまり、その活動は単なるドリル活動ではなく、自己表現活動となるのである。そのことが「自分のもの」になるということである。その活動が「自分のもの」になれば、自ずと取り組みへの積極性が生まれ、自信を持って相手に伝えることができるだろう。これらのことから、話し手に、自分自身の考えや思い、気持ちを伝える内容を持たせる手だてとして、タスク活動は有効だと言える。

3 「『つなぎ言葉』を取り入れた活動」とは

児童が積極的に自分の思いを伝えられるようになるためには、伝える時の態度や話し方、内容は重要である。しかしそれだけでは十分ではない。聞き手の「受容的な態度」が、話し手の「積極的に自分のことを伝える態度」を育てると考える。そのような態度や雰囲気を作るためには、聞き手は、「つなぎ言葉」や「非言語コミュニケーション」等を使って、共感したことを話し手に表現する必要がある。

(1) 「つなぎ言葉」について

影浦(2008)は、「会話において、"Well" "Excuse me" "Really?" 等の『つなぎ言葉』を使う工夫をすれば、児童は英語を使う実感を持つことができる」と述べていることから、外国語活動において、会話をつなぐ「つなぎ言葉」を使うことができれば、児童はコミュニケーションを図っている実感が得られ、その楽しさを味わうことができると考える。

例えば、日本語で会話をする場合、Aさんに「あなたは何のスポーツが好き？」と尋ねられて、Bさんが「サッカーが好き」と答えて会話が終わることはない。答えに対してAさんは「へえ、そうなんだ」とか「僕もだよ」「本当に？」と返すであろう。私たちは会話において、相手の答えを聞いて自分が感じた何かを一言返すはずである。聞き手が一言返すことは、「あなたの答えを受け止めた」と伝えることになり、話し手は自分の言葉が

受け止められたと感じることになる。そのことで、双方向のコミュニケーションが深まり、コミュニケーションへの積極的な態度の育成が期待できる。影浦はこの「つなぎ言葉」を、「聞き返す際の表現」「あいづちを打つ際の表現」等に分類・提示している。それらをふまえ、聞き手がよく使うと思われる「つなぎ言葉」を表1にまとめた。

表1 聞き手がよく使うと思われる「つなぎ言葉」

あいづちを打つ場合	Really? / Do you? / Are you? / I see. / A ha. / Me,too.
共感を示す場合	O.K. / Yes. / All right. / That's right. / I like that.
賞賛を示す場合	Good job! / Nice try! / Cool! / That's nice. / That's wonderful. / That's a good idea.
聞き返す場合	Excuse me. / Pardon?
相手の行動を促す場合	How about you? / A hint, please. / One more time, please.

その中でも本研究では、聞き手が使う「つなぎ言葉」を5つにしぼり、図2にまとめた。「つなぎ言葉」を使って会話をつなぐことができれば、児童は外国語で自然に会話をしているという実感を味わうことができるであろう。児童が自在に「つなぎ言葉」を使えるように、授業の中で絵カードとして活用した。

図2 本研究で取り扱う5つの「つなぎ言葉」(絵カード)



(2) 「非言語コミュニケーション」について

卯城・蛭田(2009)は、コミュニケーションは「言葉の他に、非言語コミュニケーションが果たす役割も重要」とし、非言語コミュニケーションを次のようにまとめている(表2)。

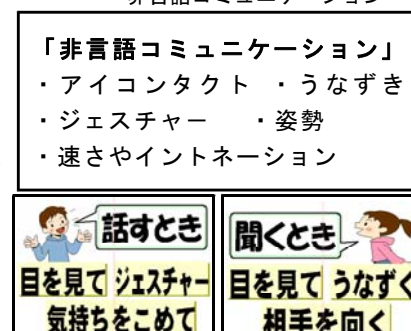
表2 非言語コミュニケーション

身体的行動	姿勢、うなずき、手の動きなどの動作や表情、相手を見るまなざしや視線などのアイコンタクト、ジェスチャー 等
空間の使い方	身体的特徴、話し手と聞き手との距離 等
準言語	声の高さや大きさ、速さやテンポやイントネーション、沈黙 等
接触行動	肩に手を置く 等

コミュニケーションにおいて、相手にメッセージを伝える際に、「言葉」と「非言語」は「35:65」と言われている(Birdwhistell, 1970)。また、人に感情や態度を伝える場合、「言葉」と「非言語」は「7:93」とも言われている(Mehrabian, 1981)。これらのことから、コミュニケーションにおいては言葉よりも非言語が高い割合を占めていることがわかる。

学習指導要領解説外国語活動編に、「言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、ジェスチャーなどを取り上げ、その役割を理解させるようにすること」と示されている。このことは、コミュニケーションを体験させる際、ジェスチャーや表情などの非言語を手がかりとすることで、相手の意図をより正確に理解したり、自分の考えや思いをより正確に伝えたりすることができるなど、言葉によらないコミュニケーション、つまり、非言語コミュニケーションの必要性を述べている。

図3 本研究で重視した非言語コミュニケーション



その中から、本研究で重視した「非言語コミュニケーション」を図3にまとめた。これ

を聞き手の「受容的な態度」として、前述の「つなぎ言葉」と関連づけて指導した。

VI 授業実践(第5学年)

1 単元名

「夢の時間割をつくろう」

2 単元目標

- (1) 積極的に自分の理想の時間割をつくり、それを友達に伝える。
- (2) ゲームや活動を通して、英語での教科の言い方に慣れる。
- (3) ゲームや活動を通して、世界の小学校の学校生活に興味と関心を持つ。

3 指導計画

	第1時	第2時	第3時	第4時
	【Warm-up】①あいさつ ②曜日・日付け・天気の確認 ③歌			
10分	「つなぎ言葉」チャンツ♪ A ha. / I see. / Me,too. / Oh, really? / That's nice!			
	○各教科の英語表現：【触れる】→【慣れる】		○時間割の言い方：【触れる】→【慣れる】→【慣れ親しむ】	
40分	①Let's Listen 教科の言い方に触れる ②Missing Game 教科の言い方に慣れる	《タスク活動①》 自分の考えを持ち寄り各グループごとに夢の時間割を作る。 「つなぎ言葉」 使用場面①	《タスク活動②》 各グループごとにインタビューゲームの練習をする。 「つなぎ言葉」 使用場面②	《タスク活動③》 他のグループの友達とインタビューゲームをする。 「つなぎ言葉」 使用場面③
	【Wrap-up】①自己評価 ②教師のまとめ ③次時に向けて			
	①自己評価には「つなぎ言葉に関する内容」「タスク活動に関する内容」を設け、毎時間共通の視点で振り返らせる。 ②「できるようになったこと」「もう少しでできるようになること」に児童自ら認識させ、次時の目標を明確にさせる。			

4 本時の指導(4 / 4 時間)

(1) 目標

自分たちの作った「夢の時間割」を積極的に伝えようとする。

(2) 授業仮説

インタビューゲームでの「夢の時間割」を伝え合う場において、「つなぎ言葉」を使ったやりとりを行うことによって、コミュニケーションを図る楽しさを実感を伴いながら味わい、積極的に伝えようとするだろう。

(3) 本時の展開

	学習活動	○教師の活動、◆指導上の留意点、□評価、【 】評価方法
導入5分	1 あいさつをする。 2 曜日、日付、天気を確認する。 3 歌を歌う。♪ Sunday, Monday, Tuesday	○HRTとJTEはそれぞれ呼びかけ、あいさつをする。 ◆他の児童にはしっかり聞かせる。

展開 30分	4 「つなぎ言葉チャンツ」をする。 5 各教科と時間割の言い方を復習する。 6 インタビューゲームのデモンストレーションを見る。	○絵カードを見せながら、表情やジェスチャー、言い方などの非言語コミュニケーションを加えて行う。 ◆チャンツと絵カードを用いる。 ◆HRT は、児童が JTE の後に安心して言えるように、リードする。 ◆HRT と JTE のデモンストレーションを見せ、聞き手の「つなぎ言葉」や「非言語コミュニケーション」に着目させる。
	A: Hi, Matsukawa-sensei. B: Hi, Suzuka-sensei. A: What's your 夢の時間割? B: (I study) ○, ○, ○, ○, and ○. (※この後に、日本語で理由を言う) A: (「つなぎ言葉」や「非言語コミュニケーション」で応え、最後は、) That's nice! B: What's your 夢の時間割? A: (I study) ○, ○, ○, ○, and ○. (※この後に、日本語で理由を言う) B: (「つなぎ言葉」や「非言語コミュニケーション」で応え、最後は、) That's nice! Thank you. A: You're welcome. B: Next one, let's go!	
	7 インタビューゲームの練習をする。 8 編成されたグループで、インタビューゲームをする。 ※仮説検証①【タスク活動】 	◆「つなぎ言葉」は、児童に選ばせる。 ○HRT と JTE の後に続いて発話させる。 ◆話し手には、「速さ・ジェスチャー・目線」を意識させる。 ◆聞き手には、『「つなぎ言葉」で会話をつなげること』『目線やうなずき等の非言語コミュニケーションを取り入れた受容的な態度』を意識させる。 ◆必要がある児童またはペアには、個別に支援する。 ※仮説検証②【「つなぎ言葉」の活用】  □聞き手は「つなぎ言葉」を使って話を聞いているか。 □ペアの友達に自分たちの「夢の時間割」を理由を含めて積極的に伝えているか。 【行動観察】
まとめ 10分	9 本時のふりかえりをする。 □コミュニケーションを図る楽しさを、実感を伴いながら味わっているか。 【発表観察】【ふりかえりシート】 10 あいさつをする。	◆視点を確認し、ふりかえる内容を明確にする。

(4) 評価

自分たちの作った「夢の時間割」を積極的に伝えようとしていたか。

VII 結果と考察

1 検証 1

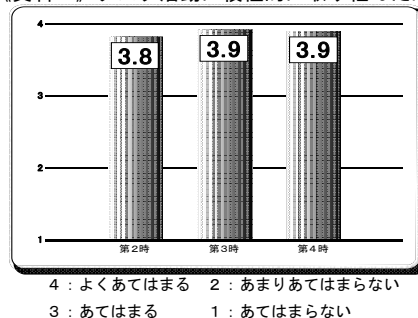
(1) 仮説 1

グループで相談し、「夢の時間割」を協力しながら作り、伝え合う「タスク活動」を行うことで、友達とのコミュニケーションを図る楽しさを味わうことができるだろう。

(2) 結果

本単元において、第1時では、英語での教科名の言い方を知り、世界の小学校ではどんな教科が学習されているかを学んだ。第2時からは、各時間にタスク活動を取り入れた。第2時のタスク活動では、グループごとに自分たちの「夢の時間割」を作り、第3時のタスク活動では、インタビューゲームの練習として、自分の「夢の時間割」をグループの友達同士で伝え合った。そして、第4時のタスク活動では、他のグループの友達と「夢の時間割」について伝え合うインタビューゲームを行った。《資料1》タスク活動に積極的に取り組んだか

《資料1》は、タスク活動に積極的に取り組めたかどうかをみた児童の自己評価結果である(数値は学級平均値を表す)。第2時は3.8ポイント、第3時及び第4時では3.9ポイントと、どの時間も高い結果となった。このことから児童らは、単元当初より、タスク活動に積極的に取り組み、単元終了まで高い意欲を持続することができた。



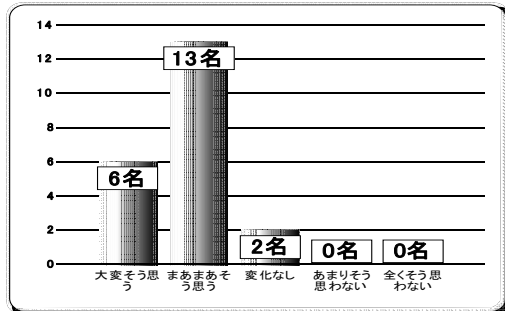
《資料2》は、タスク活動に関する児童の感想をまとめたものである。タスク活動に対し、肯定的な感想を記述した児童は17名(81%)いた。◇印の「自分が先生だったら」「自分が好きな教科で」という感想から、相手に伝える「夢の時間割」が「自分のもの」になっている様子がうかがえる。また、□印からは、「夢の時間割」を自分のものとして伝えることができた喜びや嬉しさを感じている様子が見られる。さらに、○印からは、「みんなで」「協力して」「一緒に」活動したことを、「よかった」「楽しい」と表現している。

《資料3》は、単元前後の児童の意識の変容を見たアンケート結果である。「自分の考えや気持ちを、自ら相手に伝えられるようになったか」に対する児童の自己評価結果である。「大変そう思う」「まあまあそう思う」の合計は19名となり、90%の児童が「伝えられるようになった」と答えている。

《資料2》タスク活動に関する児童の感想

- ◇自分たちが先生だったらこんな風にするなあと思いました。
- ◇「夢の時間割」は僕が好きな体育でいっぱいにした。
- 自分で作った時間割は楽しく言えたのでよかった。
- 自分の夢の時間割を聞いてくれてうれしかった。
- グループのみんなで作れてよかったし、協力して考えることができてよかった。
- みんなと一緒に「夢の時間割」を作ったのは、楽しいと感じました。
- みんなとチームワークでできたのでよかったです。

《資料3》自分の考えなどを進んで伝えられるようになったか



(3) 考察

ほとんどの児童が、毎時間のタスク活動に積極的に取り組むことができ、仲間と一緒に英語を使って課題を成し遂げられるタスク活動の特性に触れ、タスク活動そのものを楽しんだ様子がうかがえる。児童にとって、発話する内容が「自分のもの」になったということは、学習した英語表現をただ単に発話するのとは異なり、実際に自分の言葉として積極的に相手に伝えることができたものと考ええる。

また、タスク活動を取り入れたことで、相手に伝える内容が教師から与えられたものではなく、児童自ら考え、自分の言葉として相手に伝える内容を持つことができたと言える。

伝える内容が自分のことだからこそ、相手にしっかり伝えることができる。このことは、「自分自身の考えや思い、気持ちを伝える内容を持たせる手だて」として、タスク活動の有効性を示している。

これらのことから、「タスク活動」を行うことで、友達とのコミュニケーションを図る楽しさを味わうことができたと考える。

2 検証 2

(1) 仮説 2

「つなぎ言葉チャンツ」で身に付けた「つなぎ言葉」を、友達とのやりとりの中に取り入れることによって、コミュニケーションを双方向に図っていると実感できるだろう。

(2) 結果

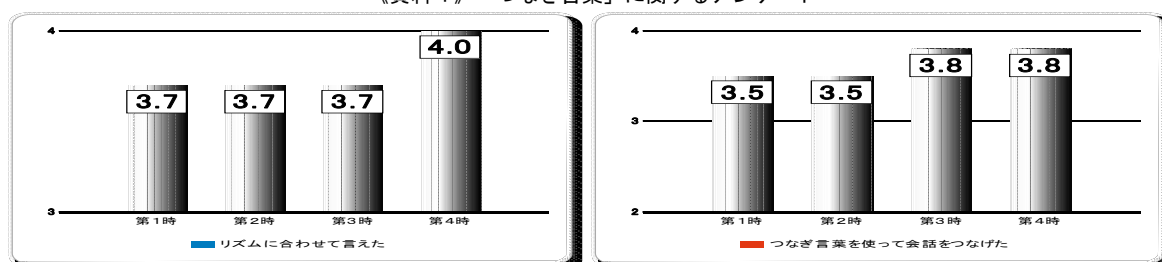
単元を通して毎時間チャンツの際に、「つなぎ言葉チャンツ」を取り入れて、「つなぎ言葉」に慣れ親しむ活動を行った。そして、チャンツで慣れ親しんだ「つなぎ言葉」を、第2時以降、実際に使う場面を設定した(表3)。

表3 つなぎ言葉を使った場面

第1時	Warm-upでのチャンツにて「つなぎ言葉」に触れる。
第2時	グループで「夢の時間割」を作る話し合いで使う。
第3時	グループ内でのインビュエームの練習で使う。
第4時	他のグループの友達とのインビュエームで使う。

《資料4》は、第1時から第4時における「つなぎ言葉」に関する児童の自己評価結果である。「チャンツでリズムに合わせて言えたか」については、3.7ポイントから4.0ポイントに、「つなぎ言葉を使って会話をつなげることができたか」では、3.5ポイントから3.8ポイントに上がっている。また、「意味を考え、気持ちを込めて言えたか」の項目では、3.7ポイントから3.8ポイントへ、「表情をつけて言えたか」「ジェスチャーをつけて言えたか」では、3.3ポイントから3.7ポイントへ上がっている。

《資料4》「つなぎ言葉」に関するアンケート



《資料5》は、「つなぎ言葉」を取り入れた会話に対する児童の感想をまとめたものである。《資料5-①》では、聞き手が「つなぎ言葉」を使って話を聞いてくれた時、話し手は、「自分の話をしっかり聞いてくれた」「話の内容をちゃんと受け止め、返してくれている」と実感していることが読み取れる。

《資料5-②》では、「つなぎ言葉」を使って相手の話を聞いた時、「よく理解できた」「相手の気持ちがわかった」と聞き手は感じていることがわかる。

《資料5-③》からは、会話に「つなぎ言葉」を取り入れたことで、お互いの会話が「本当の会話になった」「外国人としゃべっているような気がした」「話し合いやすくなった」と述べており、友達とのコミュニケーションを実感している様子がうかがえる。また、「つ

なぎ言葉」がないと会話にならないと感じていることから、コミュニケーションを図るための「つなぎ言葉」の必要性を感じ、それによって、さらに「話がはずむ」「会話がうまくできる」「話が盛り上がり楽しくできる」と書いている。

《資料5-①》

相手が「つなぎ言葉」を使って話を聞いてくれた時の感想

- ・相手がつなぎ言葉を使って、真剣に聞いていることがわかった。
- ・相手がつなぎ言葉を使っていると、自分の話を聞いていることがわかってくる。
- ・反応して言葉を返してくれているから、良かったなと思った。

《資料5-②》

「つなぎ言葉」を使って相手の話を聞いたときの感想

- ・つなぎ言葉を使って聞いたとき、よく理解できた。
- ・つなぎ言葉を使って聞くと、相手の気持ちが少しわかったような気がした。
- ・1つ1つに意味があって、その人が言ったことに反応して言えて楽しかった。

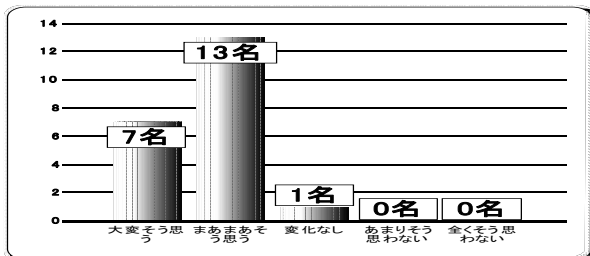
《資料5-③》「つなぎ言葉」を使った会話の感想

- ・会話がつなぎ言葉やジェスチャーをやることによって、本当の会話になってきたのでよかったと思う。
- ・つなぎ言葉を使って話すと、なんか外人としゃべっているような気がしてうれしかった。
- ・つなぎ言葉を使うと、話し合いらしくなる。
- ・つなぎ言葉を使わなかったら、会話にならないことがわかりました。 ・どんどん話がはずんだ。
- ・会話がうまくなってきたと思いました。 ・話が盛り上がって楽しくやりとりができた。

《資料6》は、相手の話を聞くときの単元前後における自分自身の変化に対する自己評価結果である。《資料6-①》では、20名(95%)の児童が、単元前と比べると、相手の話を聞くときに、話し手の気持ちや伝えたいことを考えながら聞こうとするようになった。また、本研究では、「つなぎ言葉」と併せて、聞き手の「受容的な態度」として非言語コミュニケーションを取り入れた。その結果、《資料6-②》からは、18名(86%)の児童が、相手の話を聞く際に、アイコンタクトやうなづき等を意識していることがわかった。

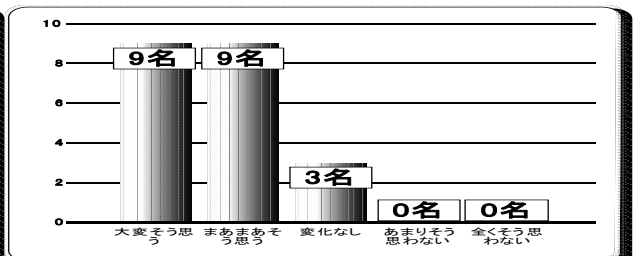
《資料6-①》

話を聞くと、相手の気持ちなどを考えるようになったか



《資料6-②》

話を聞くと、相手の目を見たりうなづいたりするようになったか



(3) 考察

「つなぎ言葉チャンツ」によって、児童らは「つなぎ言葉」に慣れ、会話の中に取り入れて使えるようになった。また、意味を考え、気持ちを込めて「つなぎ言葉」を使えるようにもなり、表情やジェスチャーをつけることもできるようになった。「つなぎ言葉」を使うことにより、相手への理解がより深めることにつながることがわかった。

「自分の話を聞いてくれている」という話し手の安心感は、聞き手の「つなぎ言葉」によって、導かれていると言える。さらに、「つなぎ言葉」を使うことは、聞き手の話を聞く態度を積極的なものにしていくこともわかった。このことから、話し手と聞き手が互いの考えをしっかりと理解し合い、それに応え合うために、「つなぎ言葉」が有効な手だてであると考えられる。

以上のことから、「つなぎ言葉」を使って会話をするによって、話し手と聞き手は、双方向にコミュニケーションを図っていることを実感していると考えられる。

3 学びのひろがり

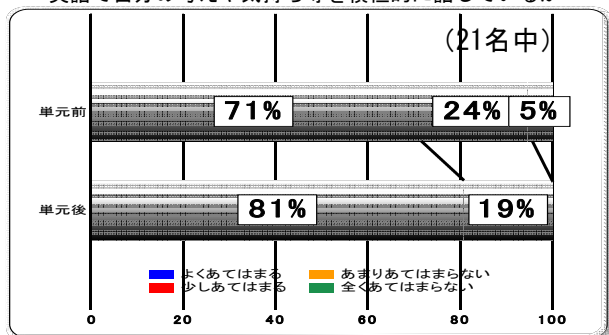
(1) 単元前後の児童の姿から

① 結果

《資料7》は、単元前後に実施した児童アンケートの結果である。単元前後を比較すると《資料7-①》では、「英語で積極的に話すようになったか」に対して、肯定的に答えている児童は95%から100%に、否定的に答えている児童は5%から0%になった。《資料7-②》においては、「英語を一生懸命に聞くようになったか」に対し、肯定的に答えている児童は90%から100%に、否定的に答えている児童は10%から0%になった。

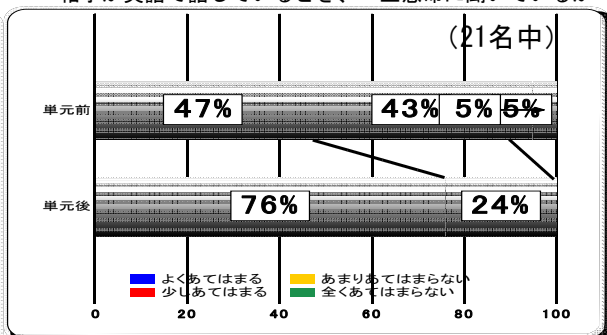
《資料7-①》

英語で自分の考えや気持ち等を積極的に話しているか



《資料7-②》

相手が英語で話しているとき、一生懸命に聞いているか



《資料8》は、単元前後に実施したコミュニケーションに関する児童アンケートの結果である。質問項目①、②に対する未記入児童数はそれぞれ、8名から1名、15名から10名と減少した。

《資料8》コミュニケーションに関するアンケート

質問項目	主な回答	未記入児童数	
		(単元前)	(単元後)
① コミュニケーションを図るとき、あなたにとって一番大切なことは何ですか。	- 相手に伝える気持ちを持つこと - 心(気持ち)を込めて話す - 相手に自分の言いたいことが伝わること - 会話がスムーズにいけるようにする 等	8名	1名
② 話を聞くと、相手が話しやすくなるために気をつけていることは何ですか	- つなぎ言葉を使うこと - うなずいたりしてジェスチャーを使うこと - 相手の目を見る 等	15名	10名

② 考察

本単元を通して、児童全員が、積極的に英語を話すようになったり、相手の英語を一生懸命に聞こうとするようになってきた。また、コミュニケーションについてどう考えているかを尋ねたとき、単元前は書けなかった児童らが、単元後には「つなぎ言葉を使って会話する」「相手の目を見て聞く」「気持ちを考えて話す」など、記述することができた。このことから、単元を通して、コミュニケーションを図る際の具体的な行動を児童らが意識化できるようになったと考える。また、質問項目②の結果では、未記入児童が5名減少し、記入できた児童数は6名から11名と約2倍に増えた。このことから、今後も同様の指導を継続していけば、聞き手の受容的に話を聞く態度が育っていくだろう。

また、下線部から、児童らがコミュニケーションを図るときに、何を大切に考えているかがわかる。話し手としては、「自分のことをわかりやすく伝えようとする積極的な態度」、聞き手としては、『つなぎ言葉』やジェスチャー、アイコンタクトを取り入れて、相手

を理解しようとする受容的な態度」だと児童らは意識している。

本単元を通して児童らは、話し手や聞き手としての望ましい態度を具体的に考えることができるようになったと言える。

(2) 「つなぎ言葉」に対する感想から

① 結果

本研究では、聞き手が「つなぎ言葉」を使って話を聞く活動を取り入れ、《資料9》は、その「つなぎ言葉」に対する児童の感想である。

◇印では、授業だけでなく、生活のあらゆる場面において使ってみたいという気持ちが表現されている。○印は、将来外国に行き、実際に「つなぎ言葉」を使ってみたいとあり、外国人とも積極的に関わりたいという気持ちの芽生えととらえることができる。□印からは、友達や先生をはじめ、いろいろな人と話してみたい、関わりたいという気持ちがうかがえる。

《資料9》「つなぎ言葉」を使ってみての感想

◇一日のあらゆるところで使えそう。 ◇日常生活の会話で使いたい。 ◇プライベートでも友達と使ってみたい。
○外国に行って"A ha." "That's nice."とかを言ってみたい。
□いろいろなつなぎ言葉があったので、友達や先生との間でも使ってみたい。
□グループのみんなと話せることができてとっても楽しかったです。 今後はいろいろな人と話してみたいです。

② 考察

本研究で取り入れた「つなぎ言葉」に興味・関心を持ったことをきっかけに、いろいろな人と関わりたいという気持ちになっていると見られる。このことは、本研究テーマである「積極的にコミュニケーションを図る児童」の姿を表している。「つなぎ言葉」を使うことによって、コミュニケーションに対する態度が積極的になりつつあると考える。

VIII 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 「タスク活動」によって、発話する内容が「自分のもの・言葉」になり、発話への積極性が見られ、コミュニケーションを図る楽しさを味わわせることができた。
- (2) 「つなぎ言葉」によって、話し手は話を聞いてもらえる安心感が得られ、聞き手は積極的に話を聞こうとする態度が身に付き、コミュニケーションを双方向に図っていると実感させることができた。

2 課題

- (1) 発達段階に応じた「タスク活動」を取り入れた教材の開発。
- (2) 「つなぎ言葉」及び「非言語コミュニケーション」を取り入れた学習指導の継続。

《主な参考文献》

- 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 文部科学省 東洋館出版 (2008)
『小学校 新学習指導要領の展開 外国語活動編』 兼重昇・直山木綿子 編著 明治図書 (2008)
『小学校 新学習指導要領の展開と解説』 安彦忠彦 監修 大城賢・直山木綿子 編著 教育出版 (2008)
『平成20年改訂 小学校教育課程講座 外国語活動』 卯城祐司・蛭田勲 著 ぎょうせい (2009)
『小学校英語教育の進め方 「ことばの教育」として 改訂版』 岡秀夫・金森強 編著 成美堂 (2009)
『新しい時代の小学校英語指導の原則』 影浦攻 著 明治図書 (2007)
『小学校英語セミナー No. 31 コミュニケーション力を育む工夫』 影浦攻 編著 明治図書 (2008)